

# へば図書館さ行くべ 第一回

「これはやばい」

スマホに表示された時間は8時20分だった。いつの間にかアラームを止めたんだらう。いくらここが大学から徒歩5分のアパートだからって、これはやばい。やばすぎる。今日の1コマは絶対に欠席できない。なぜなら「先週も寝過ごしして出られなかったからっ！」

朝ごはんは諦めよう。顔を洗って歯を磨いて、適当な服に着替えて

「行ってきます！」

誰もいない部屋に挨拶して、スニーカーをつつかけて外に出た。

◆ ◆ ◆

「あ。おはよ、サキ」

「お…おはよ…ヒロ…」

セーフ。まだチャイムは鳴っていない。めっちゃ走ったおかげで、めっちゃ息が苦しいけど、なんとかセーフ。

「おめ、先週も寝過ごしちゃあべさ…」

去年まではちゃんと1時間目から授業さ出でらのに、なしてそう起きらいねんだべがなあ」

そういうば、高校生だったときは1時間目から授業に出るなんて当たり前だった。入学からたった2ヶ月しか経っていないのに、もうずっと昔のことみたいに感じる。

「ヒロはいいよね、実家暮らしだから」

「どうせ夜更かししちゃうんだべさ」

「う…」

返す言葉もない。あーあ。せっかく、過保護な家族から離れられて、晴れて一人暮らしを始めたっていうのに、最初にできた友達がこんな説教くさい奴だなんて…

「ほら、先週の分のノート」

「カミサマありがとう」

「あ、先生来たはんで、まだあどでな」

受け取ろうとしたノートを急に引っこめられて、差し出した腕が空振りし

た。仕方ない。この講義が終ってから借りればいいや。先生の声を聞き逃さないよう、急いでベンケースとルーズリーフを取り出した。

◆ ◆ ◆

「…あれ？」

気付いたら、何故か教室にはヒロしかいなかった。先生もほかの学生もいない。時計は10時。おかしいな。確かさっきまでは9時過ぎくらいだったはず。ここ1時間ほどの記憶が無い。黒板にはレポートの課題と締切だけが書いてある。

「オハヨウゴザイマス」

「え、私、寝ちゃった？」

「どうしよう。ルーズリーフは途中でら真っ白なのに、レポートなんてどうやって書けばいいんだらう。」

「自業自得」

冷たい言葉が胸に刺さる。

「そ、そこをなんとか…助けてよ…」

「次からは寝ない？」

「うん」

「真面目に授業聞く？」

「うんうん」

「よし、へば図書館さ行くべ」

え？図書館？？？

